一月二十五日　中川精治さんが死亡された。三十一日明正寺で行われた株式会社金泉堂書店の社葬は、遠く東京、大阪からの会葬者もあり、豊栄市では今までにない盛大な葬儀であった。

中川さんは昭和二十二年葛塚町議会議員に当選し、直ちに議長に選任され、連続当選七回、五回議長に選任された。議会議長は議員の任期四年間と法律で規定されている。多くの自治体では、任期中に辞任を求めて二年交代とし、甚しきは一年交代である。そのようなたらいまわしをせず、適任者なら何回も選任したこの議会の良識を賛えるべきであるが、また、中川さんが稀にみる立派な議長であったことでもある。

終戦の年にできた町商工会の初代会長になり、昭和四十六年に勇退するまで会長であった。その間に郡連合会長に推され、最後は県連合会長であった。

議員と商工会長は特に長期にわたるので、後進に道を譲ると言いながら何回か推された。最後には、改選期前に主要支持者にことわってまわり、ようやく勇退した。ひとと反対の事前運動である。

全国、県、市町村の機関や団体の役員になったのはかぞえきれない。ところが、自らその地位や職をめざして運動したものが一つもない。北蒲原郡県議会議員の補欠選挙に立候補を要請され、他に有力候補がなく、当選確実なのに受けなかった。その選挙では、小数派である民社党の大滝甲子雄さんが当選した。

多くの公職をもつ者は、会議に出席するだけ、ということになりがちなものだが、中川さんは一つ一つの役職に責任を感じ、重要な問題を抱えているとみるや積極的にとり組んだ。町の発展を考え、特に商工振興は自分の責任だとして、国や県の施設誘致には熱心だった。行政担当の私たちが、中川さんにひき出されて陳情に行った、という感さえある。私は長い間行動を共にしたが、電報電話局設置の陳情に三年間長野へ行ったこと、市制特例法制定運動に二年間上京したことなど、特に回数が多いだけに思い出が深い。

公務だけでも忙しいのに、個人の生活、就職、結婚、金融、はては道路交通や税法違反の後始末まで頼まれてこまめに世話をした。

中川さんの判断は早い。よく考えもせずに結論をだすのだが、不思議に間違いがない。私心がなく、豊かな経験による最高の常識がはたらくのだろう。そして、直ちに行動する。多くの人は陰口を言うだけだが、中川さんは直接その人に注意する。親切心からである。

私が葛塚農商学校へ入った年、中川さんは早通から嬢養子にきた。そのときの金泉堂は、家族営業の小さな本と文房具の店だった。今では、書籍、文具、事務機、運動具、楽器で多くの支店をもつ、この種の店としては阿賀北最大の会社である。それは商才によるものでなく、中川さんの人格に対する信用と努力によるものであろう。

豊栄市の発展はもちろん、県の中小企業振興の功績に対し、大臣、県知事をはじめ、各種団体からの表彰状、感謝状もかぞえきれない。生存者叙勲では勲五等双光旭日章を賜っている。

長年のご努力に敬意と謝意を表し、心からご冥福を祈る。

市長の日誌　石井新一

やあ!! おげんきですか

仕出し業のあい間は受講生

加藤フミさん（長戸邑）

▲〝まず花をいけて、今日も一日がんばらなくっちゃ〟と加藤フミさん。

「きのうの夜（五日）も、吹雪の中、大阿賀荘まで、生花の教室に行ってきましたよ」

商売は忙しいんでしょう

「本業は仕出し屋ですが、結婚式場もやっています。もっとも、夫や若手がやっているんで、私は手伝いですがね」

習いごとする時間がよくありますね

「仕出し屋は、忙しい時は本当に目が回るほどです。でも、そう毎日ではありません。配膳の手伝いや、皿洗いそれに、一歳半の孫がいるので子守りですから、結構、暇がないんです。昼間の講座へ出ていたんですが、とても続かなくて、夜の方へ回りました」

習いごとの動機など

「このとしまで、とにかく、働くことに専念でした。最初京ケ瀬村で、店を開いていたんです。商売がら、冠婚葬祭には、仕出しがつきものでしょ。葬式であればお悔み、建前などは祝い酒を、しるしとして持っていくんです。その時、御香典とか、御祝とか書くでしょ。そのためにと思って書道講座へ。生花は、これまた商売がら、いつも花をいけなければならないので、生花教室へと……みんな自分の生活に結びついていることなんです。まあ、六十の手習いと言ったところでしょうか」

近所では、ハッスルバアサンと呼ばれているとか

「そうですか、そんなことも、若いころから思っていたのですが、ようやくつかまることができました。友だちの中には、〝こんな寒い夜に、わざわざ大阿賀荘まで、いかなくとも、コタツの中にでも入っていたら〟なんていう人もいますが、おもしろいし、適当にやっていますから、全然苦になりません。こんど、手芸や俳句なども勉強したいと思ってはいますがなかなかねぇ……こうして、自分の思うことができるのも若手のおかげです。そのためにも、がん張らなくちゃ」

転免許をとりました。仕出しを運んでいくと、私が、助手席から降りないで、運転席から降りるもんだから、たまげますね。書道、生花のほかに三味線も習い始めました。私は、声がよくないから、せめて楽器でもと、若いころから思っていたのですが、ようやくつかまることができました。

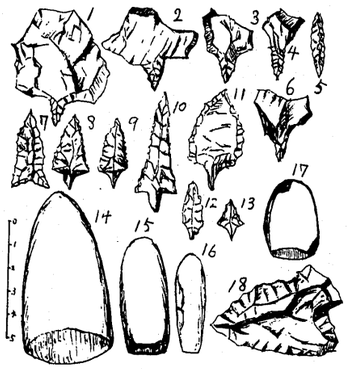
……十三年前に、自動車の運

出土・遺跡は語る (22)

鳥屋遺跡

㈠石錐（図1～6）石のきりでつまみのあるものと無いものがあります。つまみの無いものは柄をつけて使用しました。鳥屋ではつまみのあるもの五本と無いものが三本程ありました。

㈡石鏃（図7～13）矢の根石ともいわれ、無柄式と有柄式があって無柄式が古いとされています。この度は六十本程発掘されましたが無柄式は二本程しかありません。黒曜石が一本、めのう製のきれいなのが五・六本ありました。7から13までは石田喜一郎さんからいただいたもので7が無柄式で7と10は水晶です。三角は非常に少なく、岩船郡布部に三角形式九本、かえり式六本を拾ったことがあります。



㈢石斧（図14～17）打製と磨製がありますが鳥屋は全部磨製です。長い柄をつけて、木を切ったり、家を造る時穴を掘ったり、又武器にも使いました。使い方がひどいので、ほとんど折れて居り満足のものは五、六本しかありません。ざっとみても頭の方十一本、刃の方十九本、胴の方六本ありました。打製石斧の分銅型は関東地方独特のもので八ッ台は茨城県にあります。磨製石斧には蛇紋岩などの美しい小さな石斧もあります。又石鏃に水晶やめのうに手のこんだ細工をしたものもありますが縄文人が技術を游り美術品として愛好したものではないでしょうか。

㈣石匙（図18）皮はぎといわれていますが削った貝をあけたりしたものでしょう。縦型と横型とあって鳥屋は横型で一本ありました。江戸時代には天狗のめしがいとよばれ奥羽地方に発達し西に行くに従って数はへります。

―畠山佑二記―

はし

(11) 新町橋

「新町橋は、町浦川に架かる橋で、上町から下嘉山に至る新町小路にある所から、この名がついたんですね」

橋の近くに住む溝田六松さん（嘉山一・七七歳）は、当時を思いだしながら

「今の橋は、昭和八年の一月に完成したんですが、実際は、七年にできたんですね。春から仕事にかかって、暮れにでき上ったと記憶しています。世は、浜口内閣のあとの不景気の時代で、救農工事といいますか、救済事業の一つだったんですね。別名「道楽工事」とも言われました。だから手間取り（人夫）は、ほとんど百姓（農家）を使ったんです。そのころの米一俵の値段が、四円から五円。酒の二級で一升七十銭、人夫賃は五十銭でした。変な話ですが当時は、景気が悪く、この辺からでも、新発田の女郎屋へ売られていった人がいましてねぇ」

「この橋の前は、木橋でした。九尺ぐらいありましたかな。木橋というと、だいたいが、杉材なんですが、このの中は、クイ、ケタ、シキ板のすべてが、栗の木にできていました。だどこきの木で、夏になったりすると、でこぼこができ、歩きづらかったねぇ。現在の橋を架ける時は、十間ばかり上手に仮橋をつくったんですが、ちょうど、その時近所で結婚式があり、中条町からタクシーで、嫁さんがきたんですが、橋を渡ることができず、歩いていったことを覚えていますね」

以前の交通量は多かったといいますが

「ほんとだ、多かったねぇ葛塚市場が本町にあったころ

ここは蛟線でした。笹岡や神山（現笹神村）の山手の人がきのこや笹など、山のものを持って、朝の三時ごろから、ここを通りましてね。それはにぎやかでした。今の交通量は、そのころの十分の一ぐらいですね。今は大きい道路を通ると危ないとおもう老人や小さい子どもが中心ですね」

「古い話になるが、ここは蒸気船の渡し場があり、切符を切っていたんですよ。今の町浦川からは、想像もつかんですが……ほかに、クロブナやコイなどをヨウモツコヤをつくり採ったもんです。当時のこの川は、十二俵積みの船が、とも返る（一回転する）ことができたんですからねぇこの川からは考えられませんねぇ」

▲（写真は現在の新町橋）